佐渡を世界遺産に

世界遺産登録に向けて

鶴子銀山(9)　田中清六の登場

上杉景勝が会津120万石へ移封されてから9カ月後の慶長3(1598)年9月18日、豊臣秀吉が没します。すると、秀吉の遺命によって設けられていた、いわゆる「五奉行五大老」体制が揺らぎ始めてきました。

伏見城下で五大老の一人として徐々に勢力を増していた徳川家康は、豊臣側であった景勝の動向を近隣の領主たちに監視させました。

会津と国境を接する出羽の角館城主戸沢九郎五郎もその一人で、慶長4年11月20日付けの家康から九郎五郎宛の手紙でその様子がうかがえます。

内容は、「飛脚到来、祝着に候。その表の様子その意を得候。なお、田中へ申すべく候」というもので、景勝の動向を監視している戸沢に対して、「田中」という者にも知らせておけという内容です。この田中とは、のちに家康から佐渡代官として派遣される田中清六のことを指しています。

清六は、近江国高島郡の田中下城村に生まれとされる生没年不詳の人物です。一族の田中兵部大輔吉政が、豊臣秀吉の甥である秀次の筆頭家老格であったことから、清六も秀吉に重用されたと伝えられています。

17歳のころから鷹商として、奥羽(東北地方)に出入りしていましたが、実は秀吉の命を受けて、奥羽の有力者の動向を探ることが目的だったようです。

しかし、その一方で、『東奥旧史集』という史料に、「京都二条辺の者に、鷹買の清蔵(清六)といえる者、折々松前へ往来して、信直公田子の館に在りしみぎり、甚だ愛されしが…」とあるように、秀吉の動向を奥羽の有力者の一人南部信直へ伝えたり、秀吉への拝謁の仲介をとるなど、南部公にとっても重要な役割を担っていました。

田中清六の花押(写真中央)
『佐渡相川郷土史事典』より

◆市役所世界遺産推進課（金井就業改善センター内）☎63―5136

地域おこし協力隊の活動を紹介します

相川金泉地域担当
小林美由紀さん

私はこれまで、いろいろな集落の行事に参加させていただき、小さな集落の大きな力を感じています。

金泉地域には6集落ありますが、現在、うち2集落が限界集落に相当し、さらなる高齢化は免れない状況です。

「限界集落」とは、集落を構成する人口の半数以上が65歳以上で、農作業や冠婚葬祭など、集落としての共同体の機能を維持することが限界に近づきつつある集落を指します。失礼ながら、「活気がない」「寂しい」という先入観を私は持っていました。しかし、本当の姿は違いました。活気があって、前向きな様子がよく伝わり、「限界集落」という言葉が全く似合いません。

私の活動のひとつに、地域の茶の間の支援を挙げています。「地域の茶の間」は、健康維持や認知症予防の目的以上に、お互いが元気な顔を合わせて楽しい時間を共に過ごすという目的があります。

集落ごとに雰囲気が異なるものの、どの集落も笑い声が響いてとても賑やかです。もともと歌や踊りなどの芸達者が多く、楽しいことが大好きな皆さんです。負けず嫌いな気質があるのか、チーム対抗の勝負ごとには特に熱が入り、年代関係なく盛り上がります。「仲が良いな」「人が集まるとあたたかいな」と感じます。

また、下の世代が年配世代を気遣う姿が見受けられ、当然の事かもしれませんが、周囲をよく見て、思いやる優しい気持ちを常に持っているからできることです。人と人との繋がりが素晴らしいなと感じます。

このような時間を共有できたことにより、「活気があって元気な集落」であるという印象に変わりました。私にとって、地域や集落を知るための場でもあり、皆さんと共に過ごす時間を楽しみにしています。これからも、集落の事や皆さんの事をたくさん教えてくださいね。

笑い声の絶えない地域の茶の間

◆市役所地域振興課　地域振興係　☎63―4152